

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第28回新潟糖尿病談話会

日 時 平成11年3月27日(土)  
午後1時30分より  
会 場 長岡赤十字病院  
看護専門学校大講堂

## I. 一般演題

## 1) インスリン抵抗性改善剤の効果

— トログリタゾンとプロホルミンの比較 —

中村 宏志・中村 隆志(中村医院  
内科)

【目的】トログリタゾンと BG 剤により血糖コントロール改善効果を認めた症例と認めなかった症例の差について検討した。【対象と方法】NIDDM 20名を10名ずつ2群に分け、A 群にはトログリタゾン 200 mg/日を B 群にはプロホルミン 100 mg/日を6ヶ月間投与し、1ヶ月毎に体重、FBS、IRI、HbA1c を測定した。(6ヶ月後に HbA1c が1%以上低下した者を有効例とした。)【結果】A 群では4例が、B 群では7例が有効例であった。両群とも有効例と無効例の間に、体重、BMI、HbA1c、FBS、空腹時 IRI、血清脂質について有意差を認めなかった。A 群の有効例の中に、2-4ヶ月後 HbA1c の低下を認めたのに6ヶ月後に上昇していた者が4例存在し、すべて体重の増加を伴っていた。【結語】トログリタゾンにより血糖コントロール改善効果が持続しなかった症例は体重の増加を認めた例であった。このため、肥満例ではトログリタゾンの投与は慎重に行うべきと考えられる。プロホルミンは、投与中の体重増加を認めた例が少なく、肥満例の治療に有用であると考えられた。

## 2) 糖尿病患者酸化 LDL, 糖化 LDL の臨床的意義について

星山 真理 (柏崎中央病院  
内科)  
稲野 浩一・三井田 孝 (新潟大学  
岡田 正彦 (検査診断学教室))

【目的】NIDDM 患者 LDL における糖酸化状態をみる。

【対象】NIDDM 女性24名と健常者7名。

【方法】抗糖化 LDL-, 抗酸化 LDL 抗体を ELISA 法で、超速心分離した LDL の  $\text{Cu}^{2+}$  による Diene 形成も測定した。

【結果】1. glc-LDL と ox-LDL 間に相関はなく、“糖酸化状態”を捕えることはできなかった。

2. glc-LDL と  $\text{Cu}^{2+}$ -LDL 間及び ox-LDL と  $\text{Cu}^{2+}$ -LDL 間にも相関を認めなかった。

3. glc-LDL は LDL 及び ApoB とより相関を示した。

4. FBG, FRA, HBA<sub>1</sub>C と glc-LDL 及び ox-LDL の相関をみると、いずれも FRA で最も相関を示した。

5. 急性肺炎、脳梗塞、心筋梗塞合併患者では、病状安定期に  $\text{Cu}^{2+}$ -LDL の易酸化性亢進をみた。

【まとめ】以上、NIDDM 患者における糖酸化現象を検討した。血中脂質粒子のサイズ、その含まれるアポ蛋白量の変動、多様な抗原性、抗体の血中滞留時間の違いなど、測定系に影響する要因が多く、高血糖→酸化ストレス→糖酸化現象を把握するには未解決な点も多いと思われる。

## 3) 筋緊張性ジストロフィーと NIDDM を合併した一例に対する DHEA-S 製剤の効果

岡塚貴世・廣野 崇  
大山 泰郎・羽入 修  
浮須 潤子・鈴木亜希子  
長沼 景子・石川 真紀  
鈴木 克典・中川 理 (新潟大学)  
山谷 恵一・相澤 義房 (第一内科)

筋緊張性ジストロフィー (MD) において副腎性 androgen である DHEA-S (Dehydroepiandrosterone-sulfate) 投与が有効であったとの報告があり、2型 DM を合併した MD 患者に DHEA-S を投与し、投与前後の MD の変化及び耐糖能等につき検討した。

症例は48歳男性。25歳より DM で insulin 治療、32歳